

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

中古語における形容詞テ形をめぐって：  
形容詞の意味分類との関わりから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): Corpus of Historical Japanese (CHJ) 作成者: 菊池, そのみ, KIKUCHI, Sonomi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001634">https://doi.org/10.15084/00001634</a>

## 中古語における形容詞テ形をめぐって —形容詞の意味分類との関わりから—

菊池 そのみ（筑波大学大学院人文社会科学研究所）

### Te-form adjectives in Early Middle Japanese: From the perspective of semantic classifications of adjectives

Sonomi Kikuchi (Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba)

#### 要旨

本稿は中古和文資料を対象として中古語における形容詞テ形の出現傾向を明らかにするものである。『日本語歴史コーパス平安時代編』を使用し、形容詞テ形と形容詞ゼロ連用形の用例を抽出して両者の比較から以下の3点を明らかにした。まず、形容詞の連用形全体に占める形容詞テ形の割合はおよそ1割であり、動詞の場合にはテ形が9割を超えることと対照的な結果が得られた。これに加えて現代語における同形式との比較によって通時的な変化についても問題を提起した。次に形容詞テ形の出現傾向は文章のスタイルに影響を受けないことを指摘した。最後に「あり」、「をり」などの存在動詞が後続する場合についてテ形の出現傾向を形容詞の意味分類を踏まえて分析した。その結果、テ形の場合には「感情」や「評価」を表す形容詞が多い一方でゼロ連用形の場合には「状態」を表す形容詞が多いということが明らかとなった。

#### 1. はじめに

中古語においては形容詞の連用形<sup>1</sup>に接続助詞「て」が後接した形式と接続助詞「て」が後接しない形式とはどちらも(1a)、(2a)のようないわゆる副詞的な修飾や(1b)、(2b)のような文と文をつなぐ接続を担うことができる。本稿は『日本語歴史コーパス平安時代編』(以下、「CHJ」)を使用し、これらの形式の出現傾向や形容詞の意味との関係などについて用例数及びその割合から中古語における傾向を捉えるものである。

- (1) a. それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。 (竹取物語)<sup>2</sup>  
 b. いとなやましようしたまひて、物などたえてきこしめさず、日を経て青み瘦せたまひ御気色も変るを、内裏にもいづくにも思ほし嘆くに、いとどもの騒がしくて、御文だにこまかには書きたまはず。 (源氏物語・浮舟)
- (2) a. 三の宮三つばかりにて中にうつくしくおはするを、こなたにぞ、また、とりわきでおはしまさせたまひける、走り出でたまひて (略) (源氏物語・横笛)  
 b. よそに見やりたてまつりつるだにはづかしかりつるに、いとあさましう、さし向ひきこえたる心地うつつともおぼえず。 (枕草子・宮にはじめてまゐりたるころ)

<sup>1</sup> 活用語尾が「ク」、「シク」の場合とウ音便化した「ウ」、「シウ」の場合とを含む。

<sup>2</sup> 引用する用例の本文、作品名、章段名は全て『新編日本古典文学全集』による。なお、縦書きを横書きに改め、文の一部を引用する場合には省略部分に「(略)」と記した。また、用例中の下線は全て発表者が施したものである。

## 2. 先行研究の整理と本稿の目的

初めに『源氏物語』における形容詞の連用形について検討した進藤（1978）<sup>3</sup>、接続助詞「て」の用法をまとめた山口（1998）、形容詞、形容動詞に接続助詞「て」が下接する形式と下接しない形式との比較から接続助詞「て」の機能について検討した竹部（2000）を取り上げる。次に先行研究を踏まえた上で本稿の目的を述べる。

### 2.1. 先行研究の整理

まず、進藤（1978）は中古の資料として『源氏物語』を対象に「あさし」、「あさまし」、「あたらし（惜）」、「いとほし」、「うつくし」、「うれし」、「おもし」、「かぎりなし」、「ことごとし」、「くはし」、「つよし」という11の形容詞について、活用形別の用例数を比較した上で「く（しく）」「う（しう）語尾の連用形」の使用例について検討している。この検討に際して形容詞の連用形の「構文上の性質」を「中止法」、「上文の述語形容詞（単一形容詞の場合も含む）」が「て」助詞を介して重文関係に立つもの、「形容詞連用形が「あり」「侍り」「おはします」等の補語となっているもの」、「形容詞連用形が「思ふ」「おぼす」「見る」「聞く」等の補語になっているもので、「形容詞終止形＋と」と同義なもの、「形容詞連用形が「成る」「為」等の語の補語となっているもの」、「形容詞連用形がいわゆる副詞的修飾をなしているもの」、「形容詞連用形が他の形容詞に上接している」ものの7つに分類し、用例数を集計している。その結果から「源氏物語の形容詞の連用形は下文の述語に構文的に結合して行く性格の活用形であり、その下文との係わり方は極めておおらかな性質にある如くであり、必ずしも副詞的修飾を主たる職能とするものではないようである」と述べ、更に当該の形容詞の「程度分量を表す性格の濃厚なものは自然に文意構成上副詞修飾に近い結合になることが多く、その語義が感情を表す性格の濃厚なものは自然に中止法や、あり、おぼゆ系の動詞の補語となる結合を生ずることが多いようである」と述べている（進藤1978:20）。

次に山口（1998）は接続助詞「て」による接続法には「形容詞・形容動詞の連用法や副詞による成分、格助詞を伴う成分」などの「語的連用成分」とのつながりが認められる場合があることに着目し、これを「て」連用句<sup>4</sup>と呼んだ。この「て」連用句の前件と後件との意味関係として「内容表示」、「批評表示」、「状態表示」、「空間表示」、「時間表示」、「方法表示」、「因由表示」の7つがあることを示している。形容詞類については「て」連用句と「連用法」（接続助詞「て」が下接しないもの）との比較から「て」連用句は主句とは「別個の主述関係として、より自覚的な判断を担った」とし、一方で「連用法」は「主句内の連用成分としての修飾語にとどまる」ことを述べた（山口1998:243）。

竹部（2000）は『源氏物語』の第一部（桐壺巻～藤裏葉巻）を対象に形容詞、形容動詞に「助詞テ」<sup>5</sup>が下接する場合と下接しない場合とを比較することによって「助詞テ」の機能を明らかにした。まず、「助詞テ」の前件と後件との意味関係に着目し、「助詞テ」が下接する場合には「因果関係」、「並立関係」、「全体部分関係」、「情態修飾関係」といった意味関係を表す用例が見られるのに対し、「助詞テ」が下接しない場合は上記の4つの意味関係に加え

<sup>3</sup> 進藤（1978）では近代文芸文として芥川龍之介の短篇作品を対象とした調査も実施した上で『源氏物語』を対象とした調査の結果と比較しているがここでは取り上げないこととする。

<sup>4</sup> 山口（1998）は「て」連用句を形成する形容詞、形容動詞、動詞、名詞（＋「にて」）について検討しており、形容詞に限った議論ではない。また、形容詞と形容動詞とを合わせて「形容詞類」としている。

<sup>5</sup> 竹部（2000）は「助詞テ」や「テ」と表記しているが、本稿で扱う接続助詞「て」の範囲と異なるものではないと考える。

て「知覚内容」、「評価」を表す用例が見られることを指摘した。また、それぞれの意味関係に該当する用例数(割合)の比較を通して「テは、前件が後件に直接係るところには現れず、前件だけでのまとまりの強い場合に現れると考えることができ」、「助詞テ」が持つ機能は「テの上接部分の叙述をいったんまとめ、したがって、その叙述を後続の叙述に対して独立性の高いものとしてその部分でいったん切り、更に後続の叙述へと接続する」というものであると述べた(竹部 2000:270)。

## 2.2. 本稿の目的

上述の先行研究において形容詞に接続助詞「て」が下接する形式(以下、「テ形」と下接しない形式(以下、「ゼロ連用形」)のそれぞれの用法については用例に基づいた整理、考察が進められてきた。上述の先行研究を踏まえれば接続助詞「て」の機能は前件のまとまりを形成することと捉えられるが(1a)のようにいわゆる副詞的修飾を担うテ形における接続助詞「て」の機能はこのような説明で事足りるのであろうか。また、ゼロ連用形については進藤(1978)が形容詞の意味によって副詞的な修飾をとりやすいか中止法になりやすいかという違いがあることを指摘しており、テ形の場合にも同様に検討することによってテ形とゼロ連用形との差がどのような部分に現れるのかが明らかになる。

本稿は CHJ を使用し、テ形とゼロ連用形の出現の傾向や出現する環境(資料、本文種別による差や前後の要素)やテ形の出現傾向と形容詞の意味分類との関わりについて用例数及び全体に占める割合から中古語における傾向を捉えることを目的とする。これはテ形とゼロ連用形との違いを検討する上で基礎的なデータを提示するという意義を持つものである。これまでの研究においては特に助詞や特定の活用形を対象とする場合には索引を使用した調査によって大量の用例を精確に拾うことは困難であり、限られた資料を対象に調査されてきた。しかし、本稿の調査では CHJ を使用することにより、CHJ 所収の平安和文 16 資料の全文を対象に検索することが可能となり、全体の傾向を捉え得ることが期待される。また、現代語の同形式と比較することによりテ形とゼロ連用形との通時的な変化についても検討するための下地となる。

## 3. 研究方法

本稿では CHJ (データバージョン 2018.3) を使用し、中古和文 16 資料からテ形の用例とゼロ連用形の用例とを抽出した<sup>6</sup>。検索条件式は以下(3)、(4)、(5)に示した通りである。

(3) キー: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%")  
IN subcorpusName="平安" AND core="true"  
WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND  
tglWords="100" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

(4) キー: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形="連用形-補助")  
IN subcorpusName="平安" AND core="true"  
WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND  
tglWords="100" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

<sup>6</sup> コーパス検索アプリケーション「中納言」(ver. 2.4.2) を使用し、言語単位は短単位を用いた。

- (5) キー: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連用形%")  
 AND 後方共起: (語彙素="て" AND 品詞="助詞-接続助詞") ON 1 WORDS FROM キー  
 IN subcorpusName="平安" AND core="true"  
 WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND  
 tglWords="100" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

まず、(3)の式によって形容詞の連用形全体 16,609 例を抽出し、次に(4)の式によって形容詞の連用形のうち補助活用 1,066 例を抽出し、続いて(5)の式によってテ形 1,732 例を抽出した。最後に(3)の式によって得られた用例数から(4)、(5)の式によって得られた用例数を除くことによってゼロ連用形 13,811 例を得た。なお、補助活用の「かり」は対象から除外したため<sup>7</sup>、対象とする用例数の合計はテ形 1,732 例とゼロ連用形 13,811 例とを足し合わせた 15,543 例である。形容詞の語数として見た場合に延べ語数は 15,543 語であり、異なり語数は 520 語である。分析においては各形容詞についてテ形の用例数とゼロ連用形の用例数とを足し合わせた数における両者の割合を算出することによってテ形とゼロ連用形とのどちらを取りやすいのか(以下、「出現傾向」)を検討する方法を採った。

#### 4. 調査の結果とその分析

ここでは調査の結果を示すと共に結果に基づく分析を試みる。初めに全体の傾向を概観し、中古語におけるテ形の出現傾向を捉える。次にテ形の出現傾向と形容詞の意味分類との関わりについて検討する。

##### 4.1. テ形の出現傾向の概観

まず、全体の傾向について述べる。本節では試みに動詞の連用形に接続助詞「て」が下接した形式と下接しない形式についても調査を実施し、その結果を形容詞の結果と比較する場合がある。以下では動詞の連用形に接続助詞「て」が下接した形式を「動詞テ形」、下接しない形式を「動詞ゼロ連用形」と呼ぶ。また、形容詞と動詞との混乱を防ぐために本節に限って形容詞の場合にも「形容詞テ形」、「形容詞ゼロ連用形」と呼ぶことがある。

##### 4.1.1. 形容詞テ形の出現傾向と動詞テ形の出現傾向との比較

まず、対象とした 15,543 例のうち、テ形は 1,732 例 (11.14%) であり、ゼロ連用形は 13,811 例 (88.86%) であることから活用形としての連用形全体を見れば 9 割弱がゼロ連用形であるということが分かる。これに対して動詞についても同様に算出した結果、動詞テ形が 80.01% であり、動詞ゼロ連用形が 19.99% であることから形容詞の場合と比較するとテ形とゼロ連用形との関係が逆転していることが読み取れる<sup>8</sup>。これについては山口 (1998:217) が

<sup>7</sup> 補助活用の連用形「かり」(CHJにおける「連用形-補助」)は助動詞を後接させる「くあり」の形が変化したものである。1,060 例が「かり」に助動詞が後接する用例であり、「かりて」の用例はなかった。進藤 (1978:24) が「助動詞に連なるための活用形カリ活用は、述語的構文であるので副詞的修飾であるか述語的用法であるかの調査の対象にはならない」と述べていることを踏まえ、調査の対象から除外した。

<sup>8</sup> 用例抽出にあたっては複合動詞の前部要素を排除するため、言語単位に長単位を用いた。また、動詞連用形 58,200 例のうち、助動詞が後続する 27,934 例を除いた結果、動詞テ形 24,216 例、動詞ゼロ連用形 6,050 例が得られた。用例の確認は行っていないため、数値は参考程度に示すこととする。

形容詞の「連用法」が担う働きの一部について「動詞の場合は、述語性の強さから連用法には立ちにくいいため、「て」連用句で補完することになった」と述べていることと整合する結果である。また、いわゆる叙述を担う活用形である終止形を全ての形容詞が有している訳ではないという点も踏まえておく必要がある<sup>9</sup>。特に安本（2009:119）が中古語の形容詞についての調査を踏まえて「連体修飾用法・連用修飾用法はほぼすべての形容詞が持つが、述語用法を持つ語は全体の75%だけである」と述べていることから中古語の形容詞は修飾用法を中心に持っていたことが窺える。

更に試みに『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、「BCCWJ」）と『日本語話し言葉コーパス』（以下、「CSJ」）とを使用し<sup>10</sup>、現代語の形容詞、動詞それぞれのテ形と連用形との割合を算出した。前述のCHJを使用して算出した結果と併せて表1に示す。BCCWJの「出版-新聞」、「出版-雑誌」、「出版-書籍」のコアデータを対象として算出した結果、形容詞テ形は7.73%であり、形容詞ゼロ連用形は92.27%であることから中古語と同様にゼロ連用形が9割を占めることが読み取れる。一方で動詞テ形は54.16%であり、動詞ゼロ連用形は45.84%であることから中古語の動詞に比べて動詞テ形と動詞ゼロ連用形との比率の差が小さくなっていることが分かる。また、CSJ全体のコアデータを対象として算出した結果、形容詞テ形は21.01%であり、形容詞ゼロ連用形は78.99%であった。また、動詞テ形は82.01%であり、動詞ゼロ連用形は17.99%であることからCSJを使用した調査において形容詞はCHJ、BCCWJと概ね同様の傾向が見られたが動詞はCHJの中古語の結果と近い傾向を示すという結果が得られた。ここで提示した結果については、更に詳細な検討が求められる。形容詞、動詞ともに接続助詞「て」の用法や活用形としての連用形の文中での機能の変化などを視野に入れる必要がある。また、本稿の調査において対象とした中古和文資料が中古語のいかなる面を反映した言語資料であるのかについても議論の余地がある<sup>11</sup>。

表1 テ形とゼロ連用形との出現傾向

	中古語 (CHJ・コア)		現代語 (BCCWJ・出版・コア)		現代語 (CSJ・コア)	
	形容詞	動詞	形容詞	動詞	形容詞	動詞
テ形	1732   11.14%	24216   <b>80.01%</b>	196   7.73%	6414   54.16%	411   21.01%	9517   <b>82.01%</b>
ゼロ連用形	13811   <b>88.86%</b>	6050   19.99%	2338   <b>92.27%</b>	5428   45.84%	1545   <b>78.99%</b>	2087   17.99%
計	15543   100.00%	30266   100.00%	2534   100.00%	11842   100.00%	1956   100.00%	11604   100.00%

<sup>9</sup> これについてはまず、終止形を有する形容詞群について調査を実施した新里（1983）の研究がある。更に形容詞ごとに連用形、終止形、連体形の出現頻度に差があることを指摘した吉田（1990）や活用形の出現頻度と形容詞自体の意味との関係に着眼した吉田（1995）、安本（2009）などに代表されるような古典語に関する研究がある。安本（2009）では連用形、終止形、連体形といういわゆる活用形を更に「構文的機能」として捉え直して検討している。なお、現代語においても活用形ごとの出現頻度が形容詞によって異なっているということが橋本・青山（1992）やそれに続く宮島（1993）によって示されている。

<sup>10</sup> CHJと同様にコーパス検索アプリケーション「中納言」（ver. 2.4.2）を使用した。BCCWJにおける検索は形容詞の抽出には短単位を、動詞の抽出には複合動詞の前項や「ていく」、「てみる」などの形式を排除するために長単位を用いた。CSJは中納言を使用すると長単位を用いた検索はできないため形容詞の抽出も動詞の抽出も短単位を用いた（ただし、複合動詞の前項となる連用形や助動詞が下接するものや「ている」、「てみる」といった補助動詞を除いて集計した。形容詞の抽出に際しては助動詞が下接するものを除いて集計した）。

<sup>11</sup> 例えば福島（2008:94）は文同士の関係表示や従属節の特徴に関する調査から平安和文資料が「口頭言語的な性格を持つ言語変種である」と述べている。

## 4.1.2. テ形の出現傾向と資料や本文種別との関わり

表2にテ形の出現傾向を資料ごとに示した。資料ごとに長さ（言語量）や成立時期、作者など考慮すべき点は多数あるが表2からテ形の割合とゼロ連用形の割合とに資料による差が存するように見える。物語や日記といった資料のジャンルによる差は明確でないものの各資料において使用される形容詞にも着眼して検討していく必要がある。

表2 資料ごとのテ形の出現傾向

	テ形頻度	ゼロ連用形頻度	頻度計	テ形割合	ゼロ連用形割合
竹取物語	6	96	102	5.88%	94.12%
古今和歌集	11	140	151	7.28%	92.72%
伊勢物語	25	106	131	19.08%	80.92%
土佐日記	5	42	47	10.64%	89.36%
大和物語	34	227	261	13.03%	86.97%
平中物語	12	99	111	10.81%	89.19%
蜻蛉日記	119	557	676	17.60%	82.40%
落窪物語	159	800	959	16.58%	83.42%
枕草子	110	1185	1295	8.49%	91.51%
源氏物語	1021	8595	9616	10.62%	89.38%
紫式部日記	20	254	274	7.30%	92.70%
和泉式部日記	36	144	180	20.00%	80.00%
堤中納言物語	33	278	311	10.61%	89.39%
更級日記	33	282	315	10.48%	89.52%
大鏡	89	836	925	9.62%	90.38%
讃岐典侍日記	19	170	189	10.05%	89.95%
計	1732	13811	15543	11.14%	88.86%

表3 「本文種別」ごとのテ形の出現傾向

	テ形頻度	ゼロ連用形頻度	頻度計	テ形割合	ゼロ連用形割合
地の文ほか	1211	8895	10106	13.61%	88.02%
会話	453	4301	4754	10.53%	90.47%
会話-発話引用	24	201	225	11.94%	89.33%
歌	34	335	369	10.15%	90.79%
古注-歌	0	2	2	0.00%	100.00%
詞書	4	27	31	14.81%	87.10%
手紙	6	50	56	12.00%	89.29%
計	1732	13811	15543	11.14%	88.86%

また、表3にテ形の出現傾向をCHJにおける「本文種別」ごとに示した。「本文種別」は文章のスタイルに対応するものと捉えられる。表3から「本文種別」によるテ形の出現傾向の大きな差は認められない。この結果から中古語におけるテ形は地の文、会話文、和歌などの文章のスタイルに関わらず、おおよそ同様の出現傾向を示すということが読み取れる。

これらの観点については中世以降の資料を対象とした調査においても同様の傾向が捉えられるのかを検討することも課題のひとつである。

#### 4.1.3. 後続する要素

表4にテ形、ゼロ連用形に後続する要素を品詞ごとに示した。品詞の認定はCHJの品詞の「大分類」に従っている。ゼロ連用形は形容詞や動詞が後続する割合がテ形に比べてある程度多いことが窺える。これはゼロ連用形がいわゆる副詞的な修飾としての用法のバリエーションをテ形よりも多く持つという竹部(2000)の指摘と関係していることが予測される。

表4 後続する要素

	テ形		ゼロ連用形	
	頻度	割合	頻度	割合
名詞	119	6.87%	884	6.40%
代名詞	4	0.23%	42	0.30%
副詞	17	0.98%	88	0.64%
形容詞	36	2.08%	1864	13.50%
形状詞	3	0.17%	254	1.84%
動詞	424	24.48%	6393	46.29%
助詞	169	9.76%	2030	14.70%
助動詞	1	0.06%	0	0.00%
感動詞	0	0.00%	2	0.01%
接頭辞	11	0.64%	330	2.39%
補助記号	946	54.62%	1912	13.84%
空白	2	0.12%	12	0.09%
計	1732	100.00%	13811	100.00%

#### 4.2. テ形の出現傾向と形容詞の意味分類

次にテ形の出現傾向と形容詞の意味分類との関係について検討する。以下では算出した割合を以て比較する場合に用例数が少ない(割合が極端な値を示す可能性が高い)形容詞による影響を受けないようにテ形とゼロ連用形との用例数の合計が15例を超えている形容詞を考察の対象とした。用例数の合計が15例を超える形容詞は異なり語数では170語であり、延べ語数(延べ用例数に対応する)は13,989語である。これらが連用形全体に占める割合は異なり語数で見ると32.69%であり、延べ語数で見ると90.00%である<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> 例えば『枕草子』における形容詞の活用形に関する研究であるところの吉田(1990)は当該の形容詞の総使用頻度が10以上のものを対象としている(全体の数は示されていないため、全体に占める割合は算出できない)。また、『源氏物語』を対象として形容詞の文中における機能と形容詞自体の意味分類との関係について調査した安本(2009)は当該の形容詞の使用頻度が20以上のものを対象としている。この場合に対象となる形容詞の全体に占める割合は延べ語数で見ると87.15%であり、異なり語数で見ると24.88%である。対象とする用例数及び全体に占める割合については引き続き検討する必要があるが先行研究の調査方法を踏まえれば傾向を捉える上で大きく不足するものではないと考える。

#### 4.2.1. 形容詞の意味分類

まず、本稿における形容詞の意味分類を示す。本稿では基本的に安本（2009）の意味分類に従うこととし、「感情」、「評価」、「程度」、「感覚」、「状態」、「否定」の6項目を立てた。安本（2009）は『源氏物語』を対象に当該の形容詞の文中における機能とその形容詞自体の意味との関係について調査した研究であり、先行研究に基づいた形容詞の意味分類が示されている。ただし、安本（2009）において言及がない語については用例を概観した上で分類した<sup>13</sup>。また、安本（2009）は「つねなし」、「かぎりなし」のように「～なし」の形をとる形容詞の一部を「否定」に分類しているが本稿では「なし」のみを「否定」の形容詞とし、安本（2009）において「否定」とされている「～なし」の形の形容詞については「否定」以外の項目に分類した<sup>14</sup>。

各意味分類に該当する形容詞の一部をテ形の用例数とゼロ連用形の用例数とを足し合わせた値が大きい順に示した。各分類に該当する語の末尾の括弧内にその分類に該当する形容詞の語数を示した。各意味分類に該当する形容詞の数と全体に占める割合は表5の通りである。形容詞の意味分類ごとに見ると「感情」、「評価」、「状態」がそれぞれ全体の3割程を占めている。この値は形容詞の意味分類によって大きく結果が左右されてしまうものであり、分類の妥当性も含めて引き続き検討する必要がある。また、用例数の多い形容詞のみを対象としていることにも留意する必要がある。

- 感情： あやし、をかし、いとほし、浅まし、悲し、口惜し、嬉し、心細し、恥づかし、心苦し、懐かし、苦し（クルシ）、心安し、心憂し、わりなし、恋し、…【56語】
- 評価： めでたし、こよなし、儂し、賢し（カシコシ）、良し、つれなし、悪し（アシ）、やんごとなし、詳し、はしたなし、厳めし、事々し、艶めかし、…【54語】
- 程度： いみじ、限り無し、著し、凄まじ、言痛し、残り無し、論無し、譬え無し【8語】
- 感覚： 辛し（ツラシ）、痛し、辛し（カラシ）、涼し【4語】
- 状態： 多し、近し、疾し、深し、久し、若し、高し、遠し、長し、麗し、同じ、白し、繁し、捗々し、早し、暗し、重し、睦まし、気近し、少なし、所狭し、…【47語】
- 否定： 無し【1語】

表5 形容詞の分類ごとの語数と全体に占める割合

	感情	評価	程度	感覚	状態	否定	計
形容詞の語数	56	55	8	4	46	1	170
全体に占める割合	32.94%	32.35%	4.71%	2.35%	27.06%	0.59%	100%

<sup>13</sup> 本稿は形容詞の意味分類について検討した研究として三田村（1967）、東辻（1970）、川端（1976）、吉田（1977）、西尾（1979）、阪倉（1985）、吉田（1995）を参考としている。

<sup>14</sup> 国立国語研究所コーパス開発センター（池上尚）（編）（2016:94-95）にはCHJにおいて短単位を用いて検索する場合に「体言＋「ナイ（無い）」は『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれかで見出しになっている」場合には1短単位として認められていることが記されている。また、「～なし」の形の形容詞には後部要素「なし」が非存在の「無し」である場合と程度の甚だしさを表す「甚し」である場合との両系があり、岩村（1995）や村田（2005）などによって詳細に議論されているところである。これらの議論を踏まえ、一括して「否定」に分類すべきではないと判断し、このように対処した。

#### 4.2.2. テ形の出現傾向と形容詞の意味分類

続いてゼロ連用形との合計におけるテ形の出現傾向とその出現傾向（範囲）に該当する形容詞の語数を示したのが表6と図1である。当該の形容詞のテ形とゼロ連用形との割合を5%ごとに区切り、示している。例えばテ形0%の場合は当該の形容詞はテ形の用例が0例であり、用例はすべてゼロ連用形であることを示しており、テ形が5%の場合は当該の形容詞は連用形の用例数全体の5%がテ形であり、残りの95%がゼロ連用形であることを示している。前述の通り、活用形としての連用形全体を見れば90%近くがゼロ連用形であることから分かるようにテ形が0%~16.00%の間に集中している。

表6 テ形の出現傾向と形容詞の語数

テ形の出現傾向	0.00%	~6.00%	~11.00%	~16.00%	~21.00%	~26.00%	~31.00%	~36.00%	~41.00%	~46.00%	計
語数	33	45	29	24	14	13	5	5	0	2	170
全体に占める割合	19.41%	26.47%	17.06%	14.12%	8.24%	7.65%	2.94%	2.94%	0.00%	1.18%	100.00%

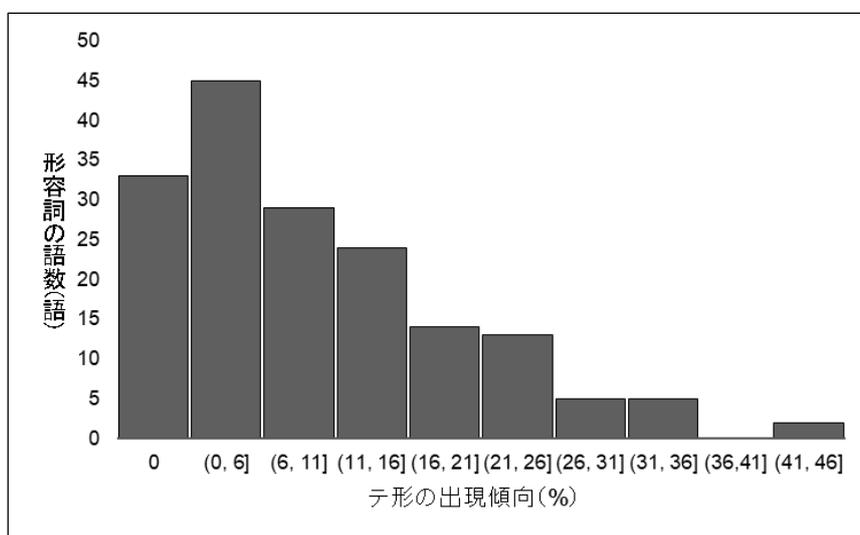


図1 テ形の出現傾向と形容詞の語数との対応

表7 テ形の出現傾向と形容詞の意味

		テ形の出現傾向									計	
		0.00%	~6.00%	~11.00%	~16.00%	~21.00%	~26.00%	~31.00%	~36.00%	~41.00%		~46.00%
感情	語数	6	12	9	9	8	7	2	2	0	1	56
	割合	3.53%	7.06%	5.29%	5.29%	4.71%	4.12%	1.18%	1.18%	0.00%	0.59%	
評価	語数	14	15	11	4	2	4	3	1	0	1	55
	割合	8.24%	8.82%	6.47%	2.35%	1.18%	2.35%	1.76%	0.59%	0.00%	0.59%	
感覚	語数	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	4
	割合	0.59%	0.59%	0.59%	0.00%	0.00%	0.59%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
程度	語数	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	割合	2.35%	2.35%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
状態	語数	8	13	8	11	4	0	0	2	0	0	46
	割合	4.71%	7.65%	4.71%	6.47%	2.35%	0.00%	0.00%	1.18%	0.00%	0.00%	
否定	語数	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.59%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
テ形の出現傾向ごとの語数の合計		33	45	29	24	14	13	5	5	0	2	170

また、表5と表6とを併せてテ形の出現傾向を形容詞の意味分類ごとに示したのが表7である。表7からはテ形の出現傾向が形容詞の意味分類によって大きく異なるといった結果は見受けられなかった。つまり、テ形の出現傾向と形容詞の意味との間には明確な対応関係が認められなかった。

#### 4.2.3. 存在動詞が後続する場合のテ形の出現傾向と形容詞の意味分類

次に「あり」、「をり」などの存在動詞がテ形とゼロ連用形とに後続する場合について検討する<sup>15</sup>。ここで存在動詞を取り上げた理由は2点ある。1点目は先行研究において挙げられている用例などを踏まえると存在動詞が後続する場合に中古語のテ形が(6a)のようにいわゆる副詞的な修飾の用法を持つことが多いと考えられることである。このテ形の副詞的な修飾の用法は前述の通り、先行研究の接続助詞「て」の機能に関する説明においては充分でなく、形容詞の意味に基づいた分析が求められる。2点目はこのような副詞的な修飾の用法のテ形は現代日本語には見られないということである<sup>16</sup>。(6a)と同じ意味で(6b)のように「かわいくて座っている」と言うことはできず、(6c)のように「かわいらしい様子」でなどに言い換える必要があるだろう。

- (6) a. それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。  
(竹取物語、再掲 (1a))
- b. #それを見ると三寸ほどの大きさの人がとてもかわいくて座っている。
- c. それを見ると三寸ほどの大きさの人がとてもかわいらしい様子で座っている。

また、現代語の形容詞を対象にテ形と形容詞ゼロ連用形との用法の比較を行った津留崎(2003:25)は(7)のように「主体の主たる状態や動作が後続句節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を、先行句節において述べるもの」<sup>17</sup>を「(副状態)」と呼び、ゼロ連用形のみが担う用法であってテ形への交替は不可能であると指摘している。これが中古語においては(6a)のように許容されていたと考えられる。

- (7) a. 花子は声も<sup>なく</sup>、立ちつくしている。(津留崎 2003:25、(93))<sup>18</sup>
- b. そういう会話を、私はお茶を持って行きながら<sup>寂しく</sup>聞いていた。(父)  
(津留崎 2003:25、(94))

これらのことは中古語から現代語に至る過程においてテ形、ゼロ連用形の用法にも変化が生じたことを示唆しており、存在動詞が後続する場合に着目することによって通時的な変化を捉えるための基礎的なデータを集めることができる。

ここでは存在動詞として「あり」、「ゐ」、「をり」、「はべり」、「おはす」、「おはします」、「さぶらふ」、「ものす」が後続する用例を対象とした。なお、「ものす」が後続する場合には

<sup>15</sup> 存在動詞が後接するもののみを対象としており、助詞などの介入やテキストに読点が施されている場合は含めていない。

<sup>16</sup> 現代語においても「大変お若くていらっしゃいますね」(作例)など一部、許容される場合があるように見受けられる。しかし、場面や共起する語に限られるため、ここでは措くこととする。

<sup>17</sup> 津留崎(2003:25)の原文の該当箇所は斜体である。

<sup>18</sup> (7)の引用箇所の下線や四角囲みは原文のままである。

動作を表す用例は対象から外した。存在動詞が後続する形容詞についてテ形とゼロ連用形のそれぞれにおいて頻度順位の上位 12 語を示したものが表 8 である。表 8 の結果からテ形は「感情」や「評価」の形容詞が多いのに対してゼロ連用形は「状態」の形容詞が多く、上位を占めていることが分かる。以下では用例を概観し、分析を試みる。

表 8 存在動詞が後続する形容詞

テ形					ゼロ連用形				
頻度順位	形容詞	意味分類	用例数	割合	頻度順位	形容詞	意味分類	用例数	割合
1	無し	否定	26	30.95%	1	多し	状態	59	8.15%
2	をかし	感情	5	5.95%	2	近し	状態	45	6.22%
2	うつくし	感情	5	5.95%	3	無し	否定	35	4.83%
4	やむごとなし	評価	4	4.76%	4	良し	評価	34	4.70%
4	心細し	感情	4	4.76%	5	めでたし	評価	32	4.42%
6	つれなし	評価	3	3.57%	6	幼し	状態	24	3.31%
6	多し	状態	3	3.57%	6	若し	状態	24	3.31%
8	若し	状態	2	2.38%	8	いみじ	程度	23	3.18%
8	もの儚し	評価	2	2.38%	8	久し	状態	23	3.18%
8	心安し	感情	2	2.38%	9	深し	状態	19	2.62%
8	麗し	評価	2	2.38%	10	賢し(カシコシ)	評価	12	1.66%
8	あやし	感情	2	2.38%	11	苦し(クルシ)	感情	11	1.52%
...(略)...					...(略)...				
合計			84	100%	合計			724	100%

まず、表 8 からテ形においては「なし」が全体の 3 割程を占めていることが分かる。(8)、(9) のようにいわゆる副詞的修飾の用法である。

- (8) 朔日の装束はとらざりければ、さりげもなくあれどはだか姿は忘れず、おそろしきものから、をかしうともいはず。(紫式部日記)
- (9) たはぶれにも御気色のものしきをば、いとわびしと思ひてはんべめるを、いと大きなことなくてはべらむには、御気色など見せたまふな。(蜻蛉日記・中巻)

次に「感情」の形容詞である「をかし」、「うつくし」のテ形について検討する。(10)～(13) のように「をかし」や「うつくし」は後続の動詞が表す主体の状態を修飾している。これは山口 (1998) の「状態表示」、竹部 (2000) の「情態修飾関係」にそれぞれ該当する。

- (10) 聞こえさせつることの残りもまだいと多かり。艶にをかしうてはべりし。まめやかに聞こえさせはべらむ。(落窪物語・巻之一)
- (11) 実方の兵衛佐、長命侍従など、家の子にて、いますこし出で入りなれたり。まだ童なる君など、いとをかしくておはす。(枕草子・小白川といふ所は)
- (12) 尚侍の君つと抱きもちてうつくしみたまふに、とう参りたまふべきよしのみあれば、五十日のほどに参りたまひぬ。女一の宮一ところおはしますに、いとめづらし

くうつくしうておはすれば、いとみじう思したり。 (源氏物語・竹河)

- (13) いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、めづらしくて、年月隔てて見たてまつりたまふは、いと恥づかしけれど、なほけざやかなる隔てもなくて、御物語聞こえかはしたまふ。幼き君もいとうつくしくてものしたまふ。 (源氏物語・若菜上)

一方で同じく「感情」の形容詞である「心細し」は状態の描写ではなく、(14)、(15)のように心情の描写であると言える。

- (14) 父はただ、われをおとなにし据ゑて、われは世にも出で交らはず、かげにかくれたらむやうにてゐたるを見るも、頼もしげなく心ぼそくおぼゆるに、きこしめすゆかりある所に、「なにとなくつれづれに心ぼそくてあらむよりは」と召すを、古代の親は、宮仕人はいと憂きことなりと思ひて過ぐさするを、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。(略) (更級日記・宮仕えの記)
- (15) ただ、常に候ふ侍従、弁などいふ若き人々のみ候へば、年に添へて人目まれにのみなり行く古里に、いと心細くておはせしに、右大将の御子の少将、知るよしありて、いとせちに聞こえわたりたまひしかど、かやうの筋は、かけても思し寄らぬことにて、(略) (堤中納言物語・思はぬ方に泊りする少将)

また、「状態」の形容詞の場合も(16)～(19)のようにいわゆる副詞的な修飾の用法が多い。しかし、中には(20)のように「人気多し」が「あらぬさまなり」(ここでは「これまでとは違う別世界である」といった意)と判断させる原因であるものもある。

- (16) 皆ののしりて、さざとして出でたまふすなはち、あこぎ告げに走らせやりたれば、少将、心地たがひて、例乗りたまふ車にはあらぬに、朽葉の下簾かけて、男ども多くておはしぬ。帯刀馬にてさきだちておこせたまへり。 (落窪物語・卷之二)
- (17) 返りごともものして、いととげにあめれど、よにもあらじ、いまは人知れぬさまになりゆくものと思ひ過ぐして、あさましうちとけたること多くてあるところに、午時ばかりに、「おはしますおはします」とののしる。 (蜻蛉日記・下巻)
- (18) かくいふほどに、年もかへりにけり。君の御方に若くて候ふ男、このましきにやあらむ、定めたるどころもなく、この童に言ふ。(堤中納言物語・ほどほどの懸想)
- (19) このおとどは、基経のおとどの太郎なり。御母、四品弾正尹人康親王の御女なり。醍醐の帝の御時、このおとど、左大臣の位にて年いと若くておはします。菅原のおとど、右大臣の位にておはします。その折、帝御年いと若くおはします。(大鏡・天 左大臣時平)
- (20) 浦島の子が心地なん。おはしまし着きたれば、殿の内悲しげもなく、人気多くてあ

らぬさまなり。御車寄せておりたまふを、さらに古里とおぼえず疎ましようたて思  
 ざるれば、とみにもおりたまはず。(源氏物語・夕霧)

続いてゼロ連用形の用例を概観する。頻度の順位が高い「多し」と「近し」とはいずれも「状態」の形容詞であり、(21)～(24)のようにいわゆる副詞的修飾の用法である。山口(1998)は「多し」を「状態表示」、「近し」を「空間表示」としている。また、(25)、(26)のように「なし」も同様に副詞的修飾と見られる。

(21) いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、  
 「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。(源氏物語・明石)

(22) 御方々、君達、上人など、御前に人のいとおほく候へば、廂の柱に寄りかかりて女房と物語などしてあたるに、物を投げ給はせたる、あけて見たれば、「思ふべしやいなや。人、第一ならずはいかに」と書かせたまへり。  
 (枕草子・御方々、君達、上人など、御前に)

(23) むかし、なま心ある女ありけり。男近うありけり。女、歌よむ人なりければ、心みむとて、菊の花のうつろへるを折りて、男のもとへやる。(伊勢物語・十八 白菊)

(24) 持ちしらぬ物設けて、ついたてて、入り臥し入り臥しすることよ」とのたまへば、おとどは、「近くおはしてのたまへ」とのたまへば、いらへ遠くなりぬれば、はての言葉は聞こえず。  
 (落窪物語・巻之一)

(25) 内裏には御物の怪のまぎれにて、とみに気色なうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。  
 (源氏物語・若紫)

(26) この家づくりはべること二年なり。そのほどもでは、音なくはべりて、かく妨げさせたまへば、いと安からずなむ嘆き申したまふ」と申せば、(略)  
 (落窪物語・巻之三)

## 5. おわりに

最後に本稿の結論と今後の課題とを述べる。

### 5.1. 本稿の結論

本稿では大きく以下の3点を明らかにした。

まず、CHJを使用した中古和文16資料を対象とした調査の結果によれば中古語の形容詞の連用形のうち、テ形は11.14%であり、ゼロ連用形は88.86%であることを示した。同様に中古語の動詞の場合には動詞テ形が80.01%であり、動詞ゼロ連用形が19.99%であることから形容詞の場合の両者の関係が逆転しているということを指摘した。これはそもそも中古語の形容詞が動詞に比べて「述語性」が低く、修飾用法を中心に持つという先行研究の記述によって説明できる。次にテ形の出現傾向は資料によって違いがあるが「本文種別」による

違いはないことを明らかにした。最後にテ形の出現傾向と形容詞の意味分類との関わりについて存在動詞が後続する場合を取り上げて検討を行った。その結果、テ形は「感情」の形容詞が多いのに対し、ゼロ連用形は「状態」の形容詞が多いことが明らかとなった。「感情」の形容詞のうちでも（いわゆる評価の意味が強い）状態の描写の場合と感情の描写の場合とがあることを概観した。存在動詞が後続する場合にはテ形の一部の例を除いてテ形、ゼロ連用形ともにいわゆる副詞的な修飾の用法を担っていることが分かる。テ形とゼロ連用形との違いを検討する上では形容詞自体の意味分類と後続する動詞のタイプとに留意する必要があることが改めて示された。

## 5.2. 今後の課題

本稿ではテ形の出現傾向と形容詞の意味との関わりについて後続する動詞が存在動詞であるもののみを取り上げたが進藤（1978）がゼロ連用形の用法として指摘した「形容詞連用形が「思ふ」「おぼす」「見る」「聞く」等の補語になっているもの」や「形容詞連用形が「成る」「為」等の語の補語となっているもの」についても同様に検討してみる必要がある。

また、いわゆる副詞的な修飾や文と文とをつなぐ接続といった用法と形容詞の意味分類との関わりについても検討する必要がある。これについては「うつくしう」のようにウ音便化した連用形としていない連用形との比較によっても検討することが課題のひとつとして挙げられる。

### 調査資料

国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス平安時代編』

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/heian.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html)（2018/07/16 閲覧）

国立国語研究所（2017）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)（2018/07/19 閲覧）

国立国語研究所（2018）『日本語話し言葉コーパス』

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/csj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/)（2018/07/20 閲覧）

### 参考文献

岩村恵美子（1995）「ナシ（甚）型形容詞—否定性接尾語を有する形容詞の考察—」『語文』, 64, pp.12-25, 大阪大学国文学研究室.

川端善明（1976）「用言」『岩波講座日本語6文法I』, pp.169-217, 岩波書店.

国立国語研究所コーパス開発センター（池上尚）（編）（2016）『『日本語歴史コーパス平安時代編』形態論情報規程集』, 国立国語研究所コーパス開発センター.

阪倉篤義（1985）「歌ことばの一面」『文学・語学』, 105, pp.51-63, 全国大学国語国文学会.

新里博樹（1983）「終止形を有する形容詞群の考察」『国語研究』, 46, pp.39-50, 国学院大学国語研究会.

進藤義治（1978）「源氏物語の形容詞の連用形の機能について」『南山国文論集』, 3, pp.7-24, 南山大学.

竹部歩美（2000）「中古のテについて—形容詞・形容動詞に下接する場合に着目して—」『国学院大学大学院紀要文学研究科』, 32, pp.255-273, 国学院大学大学院.

津留崎由紀子（2003）「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学』13, pp.7-32, 国立国語研究所.

西尾光雄（1979）「源氏物語の形容詞について」『東京女子大学日本文学』, 51, pp.1-16, 東

京女子大学.

- 橋本三奈子・青山文啓（1992）「形容詞の三つの用法—終止、連体、連用」『計量国語学』, 18:5, pp.201-214, 計量国語学会.
- 東辻保和（1970）「古典語感情形容詞研究の一視点」『文学・語学』, 56, pp.80-91, 全国大学国語国文学会.
- 福島直恭（2008）『書記言語としての「日本語」の誕生—その存在を問い直す—』, 笠間書院.
- 三田村紀子（1967）「形容詞の意味分類」『研究年報』, 10, pp.14-25, 奈良女子大学文学会.
- 宮島達夫（1993）「形容詞の語形と意味」『計量国語学』, 19:2, pp.94-104, 計量国語学会.
- 村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』, 和泉書院.
- 安本真弓（2009）「構文的機能から見た中古形容詞の特徴—意味との関わりから—」『国語学研究』, 48, pp.119(28)-105(42), 東北大学大学院文学研究科国語学研究室内「国語学研究」刊行会.
- 山口堯二（1998）「中古語「て」連用句とその周辺」佐藤喜代治（編）『国語論究第7集中古語の研究』, pp.211-247, 明治書院.
- 吉田金彦（1977）「古代語形容詞の語構成」『吉田金彦著作選8 動詞・形容詞』, pp.341-377, 明治書院.
- 吉田光浩（1990）「主成分分析法による形容詞の活用分析—『枕草子』を資料として—」『大妻国文』, 21, pp.1-16, 大妻女子大学国文学会.
- 吉田光浩（1995）「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会（編）『日本語の研究宮地裕・敦子先生古稀記念論集』, pp.112-145, 明治書院.